



番外編

# ポルノスーパースター

なあ  
気持ちよかった？





星を泳ぐサカナ 番外編

## 星に沈むサカナ

by 朝丘 辰

名字と名前のあいだには、  
果てしない距離があると思う。

彼の名前は本田裕仁<sup>ほんだ ひろひと</sup>だけど、すこし違う。

“本田さん”は片想いの頃の呼びかた。

“裕仁さん”は恋人としての呼びかた。

ふたつのそれぞれが、僕にはまるで別人を指しているように感じられるからだ。

それでいまでもつい「本田さん」と呼んでしまふときがあつて、彼に、

「俺は“本田さん”なんて人は知りません」と、わざと丁寧な敬語で叱られたりする。

付き合い始めて一ヶ月が経った。

裕仁さんはバイトをみつつもかけ持ちしている毎日忙しく過ごしているけど、休憩時間には必ず携帯メールをくれる。

『優太郎、おつかれ。いまなにしてた?』

時刻は夜九時。僕はお風呂もすませてパジャマに着替えて、部屋で勉強していた。

そう返信すると、

『大変だな。メールすると大抵勉強してる』

と返ってきた。すかさず返信文をうつ。

自分の頬が緩んで笑顔になっていくのを感じた。裕仁さんの着信音だけはメールも電話も『星に願いを』に設定しているから、頻繁に聴いてるぶんしつかり頭に残ってしまつて、知らず知らずのうちに鼻歌までこぼれる。

『裕仁さんは身体を動かして働いているんだから、家でのんびりしてる僕よりもっと大変だよ。体調を崩さないようにね。大好き』

送信したあと、画面に表示された彼のメールアドレスを読んだ。……一度。もう一度。

文字って、もの悲しい。キスを学んで、素肌の感触を知つて、お互いの身体が重なるときの体温の熱さまで憶えてしまったせいかな、なぜか、なにか足りない心地になる。

片想いしていた頃はメールアドレスすら知らなかつたんだから、彼が僕を想い出して文字を届けてくれて、自分もそれにリアルタイムで返答できるのは贅沢だつてわかるのに、無機質な文字を見ていると会いたくなつた。

近づけば近づくほど、強欲になるな……。

そしてまた『星に願いを』が鳴り響いた。

『俺も好きだよ、優太郎』

声で聴きたい。声が聴きたい。

裕仁さんは星だ、と昔みたいに実感するのは、こうしてメール交換してるときだった。

いる、とわかるのに手が届かない遠さ。

心は見えるのに、顔が見えない歯痒さ。

どんな表情で、どれぐらいの熱量の、好き、を言つてくれたんだろう。

かわらないのは、そんな彼の存在が僕のなかで常にきらきら輝いて感じられること。

十一時まえになつて布団に移動すると、今度はハルちゃんから携帯メールがきた。

『本田君の弱味を教えて。キミ以外で』

なんだこれ……?

ハルちゃんは裕仁さんと出会つたレンタルショップ『潮騒』のバイト仲間。語り癖があつたり、二十九歳の男なのに“ちゃんづけで呼んで”と頼んできたり、突拍子もない言動には慣れているものの、相変わらず不思議。

喧嘩でもしたのかな、と唸っていると、続きざまに電話が鳴つた。『星に願いを』だつたから条件反射でボタンを押して見たら、画面にはメールではなく“通話中”の表示。

えっ、と慌てて耳にあてると、

『ゆう……?』

笑みのはらんだ、甘い声に呼ばれた。

たつたそれだけで肌の表面にくすぐったい痺れが走つて、愛おしさが膨らんでしまう。

「メールと勘違いした……どうしたの?」

『はは。バイト終わったからかけてみたよ。話しながら帰ろうと思つて。寝てた?』